

# 友林蘇岐

(一)



## 講演

第十二回信濃山林會總會に於ける安藤本校長の演説(節録)

滿堂の諸君、既に數時間數多先輩名士の御講演を御聞きになつて既に腹の底が満ちてモウ飽足つて居らるゝと思ひますが暫く時間を頂きまして御茶漬を一杯献じたいと思ひまして此壇を汚すのであります私は先年五月末本縣に赴任致しまして一年二ヶ月にして今回本會山林學校を御預り致す事になりました併し乍ら未だ林務課員の位置は矢張り離れて居ないので今回信濃山林會には喜んで出席した一人で御座います而して此會は第十二回目になります本會の歴史も亦餘り淺くない十年一昔は既に過去つて居ります而して私の引受けた山林學校は此山林會と同じ時機に起つたのであります木曾山林學校の起つたのは明治卅四年で今年で十二年になります此山林會が十二年前に起り同時に我山林學校が十二年前に起つたのでありますから兎に角長野縣の森林經營林業

發達の根據は同時機に起つたので同時に長野縣民の希望と云ふものが其時に於てあつたと云ふ事を信ずるのであります其後十二年の間之に關する種々の方面に金を使ひ來つて長野縣の一新面目を現はしたるを信ずるのであります併し乍ら之と同時に一昨年及昨年の水害の如きは未だ其効果を信ずる事が出來ないのであります又森林事業の爲に如何なる獎勵如何なる補助を與へても一方各町村が森林蓋伐と云ふ事を止めない以上は到底之を償ふ事が出來ない故に此際一層森林經營の聲を大にする必要がある幸ひ縣民の輿論が漸く盛に新聞紙上に於ては森林事業治水事業等が滔々として論せられて居ります其中には縣當局の人も新聞記者も其他の人も我長野縣を愛ふる爲熱血を奮つて立派な説を吐いて居るのであります苟も長野縣内に住む者は此問題に就て深く考へなければならぬと信ずるのであります同時に私は他府縣に居る長野縣人で長野縣の爲に森林經營に就て非常の注意と配慮とを保持して居らるゝ或人の論を見まして深き印象を與へられたのであります私が遙々此山林會へ出席し不肖をも顧みず大家の末班に列して所感を申述べるのも衷心止み難きものがあるからであります借林業は机上の空論でない實際の問題であります而も専門的教育を享ける事は最も必要であります今日日本全國の中等程度の山林學校は右田博士の申された如く本縣に只一つ木曾山林學校あるのみであります林業の高等専門教育は大學の農科に併置された林學科の外に高等農林學校が三つもあります然るに中等程度の山林教育を専門にして居る所は只木曾山林學校のみであります從て此學校は文部省でも山林局でも又地方に於ても如何に重きを置かど云ふ事は局外者の一寸分らぬ事と思ひますが兎に角中等程度の山林教育は今日獨り長野縣のみならず日本の林業界が要求して居るのであります若し之を實際に徴すれば即本年入學志願者が九十一名ありました其中五十五名を試験の上採りましたが其府縣の人が其三分ノ一(實數十六人)本縣人が三分ノ二(實數三十九人)でありました只今現在生徒が百三十名居ります此内

大正四年十一月二十三日印刷  
大正元年十一月二十五日發行  
編纂兼發行人 安井正夫  
長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地  
長野縣松本市本町百八拾四番地  
印刷者 兎澤忠雄  
全縣全市全 香地  
印刷所 交文社  
長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地  
發行所 蘆澤書店

○岐蘇林友  
目次  
講演、信濃山林會に於ける安藤本校長の演説  
拔萃、木曾漆器の沿革  
通信、小松先生、岡四君より  
文苑、寸感錄憶、乃木大將  
雜報、第十二回運動會記事、選手選征軍記、會費、寄附金、領收報告、其他

他府縣人が四十一名本縣人が八十九名居ります。即ち全校生徒の三割と云ふものが他府縣人であり、又今日は岐阜縣外十三四縣に亘つて這入つて居ります。即ち之は他府縣に於ても此學校を認め又他府縣に於て専門教育の價值ある事を認め結果であると思ひます。學校の生徒は三十四年の入學者が四十七人で、其時は皆無試験で這入つたが年を追うて志願者が増加し校舎の狹隘を感ずる爲めに選抜試験を行ふのであります。山林學校は今日迄十二年間福島町元組合小學校跡を以て非常なる不便を忍んで來ましたが先年四年繼續の經費を以て新築を經營しました。目下稍落成し教授には差支ないやうになりました。來年五六月頃には寄宿舎も出來上り殆ど完成する事と思ひます。從つて社會の要求に應じ十分希望を充たす事が出來ると思ひますが今後益々學校の内容を最も健全に發達せしめ生徒の精神を鍛鍊し校風を善美にして以て益々國家に貢獻せんことは私の責任として居るのであります。夫で本校に這入る生徒に就ては小學校職員諸君に向て大に希望する次第であります。今申したやうに他府縣人が比較的多く入學して本縣人が比較的少いと云ふのは本縣教育の爲甚だ残念な事と思ひます。之に就ては今後山林學校へは可成選抜して優秀の者をよこして貰ひたいのであります。兎角今日迄は農學校や其他の實業學校へは中學校の落武者が這入る傾がある。然るに林業教育他の實業教育は暫く措て一は最も六ヶ敷い複雑な學問で最も數理的の頭を要する學問であります。林業の計畫は今日右博士の申された如く、中々容易なものでない。非常な技術的知識を要するのであります。故に苟も成績の悪い中學校の落武者などをここに擬すると云ふ事では、たなら

長野縣の林業は發達する事が出來ない固よ。日本の林業を負つて立つ譯には行かない。信するのではありません。私は山林學校を御引ます。併しながら今日山林學校を引き受けても二十年位過ぎて後でなければ其事業の眞の效果は現はれないのであります。不肖の如きは到底其目的を達し得る力がない。此點は如何か天下の有力者父兄の方に御願致さなければなりません。次に今一つ申上げ度のは今日の此總會に就て大に喜ばしき次第を御紹介致します。實は本年一月二十八日淺間山麓の北佐久郡に於て長野縣の種苗改良を以て長野縣林業の將來に向て万全の策を立てた。いと云ふので十二三人有力者が發起して長野縣に山林種苗組合を作る相談が出來ました。野縣の方には植樹獎勵費として年に二萬圓以上の金は使つて居ますが、縣下五十一町歩の縣有苗圃地に對しては到底縣の方では堪へられない。信州の森林を發達させるには是非共業に依らねばならぬ。夫で此事に就ては多年縣に於ても非常に注意を拂つて居る。障害がある殊に彼の種子屋の一般に信用のない事は實に残念であります。元來林業の根底となるものは種子と苗木であります。此大事な種子が若し不正品であつたら夫より出來た苗木はどうか、如何に進歩した計畫を立てて遣りまして、何等効のない事になる。故に種苗の改善は實に急務であります。之に就て一月廿八日の有志の決議により今日の總會を機會として縣下の種苗商十四五名集合して協議の結果長野縣山林種苗組合といふものを組織した譯であります。併し出来た許で方針も確立して居りませぬが之を縣當局發起人及縣民の力に依り最も立

拔萃

木曾漆器の沿革

西筑摩郡福島町八澤及檜川村字平澤は古來一種の漆器を産出せり。今其起源沿革を尋ぬ

るに福島町の漆器は遠く應永年間今を距る五百廿年前既に之を産したるもの如く、口碑の傳ふる所によれば慶長年間即凡三百年前同町八澤に富田山龍源寺と稱する寺院あり。後年火災に罹りし當時向城なる長福寺に合併せられしが龍源寺の火災に罹らざりし以前該寺に一の漆器あり。其裏面に應永元年正月富田町即ち現今の八澤町なる漆師加藤嘉兵衛納納と記名しありたりと云ふ。されば應永四年前に於て斯業に従事し居たる事を推知し得べし。享保年間即今より百七十八年前同町字向嶋與福寺山門二王の像は八澤町漆師七名にて塗漆し其材料は之を寄進したる事現存せる右の大像に明記しあり。又今より二百十年前の元祿年間には斯業漸次發達して其原料たる檜材は今の木曾山林中より自由に伐採して漆器を製作し居たるも享保年間に至り木曾は從來山村家の所領たりしを改めて尾州の管領に移され同時に伐木を禁止せられし爲塗師は自己の本業に従事する能はず。住民は領主に哀訴歎願して漸く一部分の檜伐採を許され且八澤町總代關本庄七外當業者に對し初めて塗物の手形を下附され毎年八十八駄(一駄は百四十貫匁)即ち一萬二千六百七十二貫を限り塗漆の木地として無代伐採の恩命に接して辛くも斯業を繼續するを得たり。而して領主は白木番所なるものを贊川、一國峠、日和田等の各要所に設け明治維新の際まで嚴重に調査點檢を行ひたり。王政復古と共に右の取締は之を解き任意製造し得るに至りたるのみならず逐年需要多く從つて産額増加し漆器中の重要物たる面飯の如きは明治七八年以降三四年頃までは陸軍の御用品となりたるを以て益盛に産額激増し之と同時に粗製濫造の弊生じ加之軍隊用は廢止され明治十七八年

の沿革なるを尋ねたる山林を傍に控へたるに依り寒暑乾濕を中和し漆器の製造地として最も適地たり。檜川村は犀川の源流地。沿ひ氣候土質等畧福嶋町に同じ。雖其原料たる檜材を得るに稍不便の感なき能はず。今兩地に於ける産額及從業者戸數を示せば製造戸數福嶋町八十三戸、檜川村百六十戸、從業者職工福嶋町二百餘名、檜川村三百五十餘名にして製産額三十餘萬圓に達す。製造の方法、原料は木曾檜材にして同郡一帶に渉れる帝室御料林の拂下を受けて之に供し漆液は下伊那、上下水内、上下高井、北安曇産のものを用ゐる。甲州、上州等より輸入す染料は主に東京、名古屋より輸入し其種類に金銀粉、朱、青、石黄、紅柄油煙、にして澁液は同郡内三岳村産のもの。最とし製造方法は先づ檜材にて白木の磨なり。重箱なり一定の型を作り之に方言コクソ(麻布を織る際織下に殆塵芥の如き微細の麻屑を出す此麻屑と麥粉、柿澁及糠を練りたるものを云ふ)を其接目又は間隙に塗抹し乾燥したる後柿澁と油とを混合せるものを裏面一帯に塗布し乾燥室に運ぶ。蓋し空氣中にて乾燥せしむる時は空氣に多少の濕氣を含有せる場合にあらざれば不可なり。既に乾燥したるものには地塗を施し表面を砥面に丁字に摩擦し屋内に風干をなしたる後、漆液にて中塗をなし乾燥室にて干し上るものなり。而して繪模樣等は中塗の際之を認め置き其上に塗液を塗布し繪畫を巧に研き出すものにして彼の繪卷と稱し仕上げの際繪模樣を施すものは上等の品なり。現況、福島町八澤及檜川村平澤共に逐年長足の進歩をなし數十萬圓の産出を見るに至

友林蘇岐

れり近時紀州又は會津地方に産出する製品に似し給模倣を施したる品を製作す是社會の進運に伴ひ需要者の好尚自然此の如くならしむと雖も元來同地方産の木會津器なるものは外觀の優美ならんよりは其木地の良好堅固にして低廉なる點に於て天下に冠たるもの換言すれば美術的に非ずして實用的なる所に價値あるものなれば當業者たるもの能くこゝに留意し社會の信用を失墜せざる模倣むべきは勿論將來一層之が改良發達を圖らざる可らず彼の會津 紀州産の意匠を模倣し之と競争するが如きは決して策の得たるものに非ず(完)

林界雜俎

朝鮮より樹種の註文、朝鮮京畿道廳より本縣林務課に向けサハラ、アラ、ギ、コノテガシワ、大葉イボタ、犬ツゲ等の樹種を購入し度由照會し來りたれば本縣にては本郡の蜂須賀、杉本二氏へ通牒せり  
●保安林の面積、本年十月一日現在長野縣の各種保安林面積は左の如し  
土砂防止林 六萬七百五十五町  
七反六畝十歩  
水害防備林 二九畝五反  
一畝十歩  
防風林 五町一歩  
二畝十歩  
類雪防止林 六十六町七反  
四畝二畝七反  
墜石防止林 七畝五歩  
七畝五歩  
水源涵養林 九千四百七十六町  
七反五畝十一歩  
風致林 三百三十町六反  
二畝十歩  
合計七萬六千六百七十七町二反九畝十四歩之を各郡地籍別にすれば

南佐久郡	四町四反
北佐久郡	七畝十五歩
小縣郡	二反六畝九歩
諏訪郡	三反四畝九歩
上伊那郡	六反四畝二歩
下伊那郡	五畝四畝七反
西筑摩郡	七畝四畝七歩
東筑摩郡	七畝四畝七歩
南安曇郡	二畝四畝七歩
北安曇郡	一畝六畝九歩
更級郡	二萬九千九百三十三歩
植科郡	四町四畝八歩
上高井郡	二反四畝八歩
下高井郡	二反四畝八歩
上水内郡	二反四畝八歩
下水内郡	二反四畝八歩
長野市	七反五畝

球磨便り

七町六三一五歩私有林七八五町九七二五歩等なり  
●井上林務課長の計、本縣林務課長井上氏は先般來病氣にて上京治療中の處藥石効無く十月十九日遂に永眠せられたり全氏は腰本縣林業の爲盡瘁せられたるに惜むべし全月二十三日同氏の葬儀長野市に營まれたるに付安藤校長公務の序を以て會葬せられたり  
小松吉次郎  
謹啓各位益々御壯健奉大賀候木會峽中今や満山の紅葉實に天下の美觀と奉推察候十月は運動會開催の時と存居候校舍新にして運動場廣く天高うして清澄なり健兒の胸中風波常ならざる事と存候珍妙奇技抱腹絶倒の餘興か勇壯活潑神變鬼没の競技か將又諒閣中に付謹懐沈黙か承り度候小生近日一勝地製材所を視察仕候に付大畧を記し申候  
一勝地製材所は熊本縣大林区署人吉小林區署の管轄にして明治四十四年の創立なり九州線一勝地停車場を去る約一里半球磨川の上流にありて規模小にして創立當時經費約四萬圓を要したり堅鋸一丸鋸二を据付け動力には三十五馬力の蒸氣々機を用ひ廢材鋸屑を用ふる事明科製材所と同様なり  
資材は専ら樺樹にして白濱國有林の産とす即當所より約十哩間軌道を布設し人馬の力にて運搬し伐木地内は木馬運搬をなす高野山事業所の如く兩者の間に特殊の連絡法なし而して伐木現場に簡單なる丸鋸工場あり

友林蘇岐

て小材を製し大材のみ當所に搬出するを以て直徑四尺以上の大丸太不少場内に累々たり抑々我國樺樹の産地は多けれども一般に材質粗悪なり然るに白濱國有林産樺材は光澤美麗木理通直瑕疵少き良材なれば大坂市場に以て名聲を高め需要益々増加し常に供給不足の状態にあり  
製品は板材小物類を専らとす余の實見したる時は四分板戸縁を最多とす一日の製材量六十五尺一ヶ年の製材量萬千六百五十尺に達せり之を四分板に換算すれば十六萬五千餘坪となり一坪五十錢とすれば八萬二千圓餘となる  
乾燥は凡て日光によれり構内日當の好き所に樞を設け之に四分板を立並べ一兩日乾燥す戸縁は井形に高く積み重ね乾燥したる材は倉庫に納れ數種に分類結束せり  
製材所職員判任官二名雇員三名職工及人夫廿五名なり製材所官行伐木所の労働者に對しては年一回又二回山祭を催して業を休み角力其他の餘興を演じ以て其勞を慰め居れり

岡西鎌三君より

謹啓在職中一方ならざる御世話様に預り出發の前日送別會まで御催し被下誠に難有御禮申上候豫定通り目黒驛に一泊今朝試験場へ出頭種々用命承り申候詳細は追て後便に可申上候得共不取敢御禮旁安着の御報迄如斯に御座候草々拜具  
二伸 遠路御見送被下候諸先生並に校友諸兄に厚く御禮申上候  
(十月十九日付)

秋の福島便り

廻らぬ筆を辿りて左に秋の福島大畧御通信候

申上ぐべく候秋風徐ろに吹きて天下の秋を告げ申候九月一日より三日間は福嶋特定のた盆にて例年ならば名物木會節の盆踊りも可有之候も本年は御諒閣中に就き御遠慮申上げ其儀無之十三日の御大葬儀當日は午後八時より小學校々庭に於て官民合同の遙拜式を舉行し又長福寺に於ては各寺院聯合の遙拜式追悼式等舉行せられ等しく明治大帝御葬儀を悼み奉り候  
各地を襲ひし暴風は二十三日早朝木會谷へ襲來勝手氣儘に吹きまくり多くの損害を殘し候内當町に於ては本年國寶指定を受けたる興禪寺の勅使門倒壊いたし候同門内に鎮座します仁王殿はしたゝかに腰骨を折られし由に御座候後内務省より技師出張検査の上近々に五ヶ月繼續を以て復舊建築に決定いたし候由尙先年焼失せし同寺の本堂は豫て再建中の處此頃に至りて形だけは畧々成り申候山林學校の移轉に十日程後れて西筑摩郡役所は舊校舍へ假事務所として引き移り候同役所は今回城山の麓なる山村公の屋敷跡へ建て換へと相成り目下工事進捗中に御座候十月は山國萬歳の時に候秋天高く晴れて氣爽やかに山に登れば栗あり松茸あり小鳥は和して自然の音楽を奏する等實に樂しきは秋の山に候月半の頃に至れば四方の山々黄に紅にとりしに織りなす錦は一入の美を添へ申候美はしきは秋の天地に候かな此勝景を見んとて木會へ來遊するもの年々多きを加へ候鐵道院其他の主催に依る何々觀楓團或は學生の修學旅行等を始めとし個人の來遊するもの又少なからず中には知名の士もぼつ／＼見え候然し本年は御諒閣中の故か概して昨年よりは少數の由に

山林學校便り

●選手の出場 十月十八、十九の兩日長野縣中學に於て開催せられたる縣下中等學校聯合競技大會へ出席せる我校選手は  
擊劍部 坂田勘太郎君(三年)  
細江七兵衛君(三年)  
松川 久吉君(一年)  
種倉 隨藏君(一年)  
吉池三九郎君(三年)  
代田文之助君(三年)  
今泉 彌作君(二年)  
龜子 壽一君(二年)  
丸山 鋼造君(二年)  
大森 悅君(一年)  
久保田吾良君(三年)  
下枝 壽一君(三年)  
東原 智君(一年)

弓術部

都合十三名にして之が爲十六日午前九時校

長は生徒一同を講堂に集め競技に關する諸注意遵守すべき精神等に就て訓示する所あり大場教諭附添ひ全日出發二十日歸校せるが本年は機運の然らしめし所が將た又選手諸君の淬礪研磨の結果なるか豫期以上の効果を取らぬ我未嘗有の大勝を贏ち得たるは雷に選手之光榮のみに非ず又我校の大に面目とする所なり今各部に就て優勝者を擧ぐれば左の如し

擊劍部 (但し二本勝負)

上伊那農校を破る 坂田勘太郎君 長野商校を破る 松川 久吉君

庭球部 (但し二組拔優勝)

松本中學及上伊那農校(吉池三九郎君に當り共に三對一の勝)代田文之助君

此外庭球の大森、丸山組は野澤中學に當り二勝三敗せりと雖も最後迄克く戦ひ弓術の久保田君は從容沈着の態度多くを誤らず之を要するに山林學校の聲價を高めて失墜する事なかりしは感謝に堪へず

●岡西助手の辭職 明治四十四年本校卒業以來助手として勤務せられし岡西謙三氏は此度東京目黒林業試驗場助手として赴任する事となり十月十六日附を以て依願解職十八日福島發一番にて出發せられたり

●選足會 十月十七日の祭日を利用して紅楓を採る傍ら弔古の意を兼ねて職員生徒一同九時出發荒神橋の奇景を賞し德音寺に義仲の墓を弔ひ旗上げ八幡の祠に詣て近傍懸崖の上にて休憩山吹横手の紅葉を賞しつゝ晝食を喫す此日天麗かにして山々の黄葉紅葉松杉の緑に交はり燦として錦繡を披くが如く眼下は即ち木曾の溪流一綫藍を布きて走る佳景云はん方なし夫々南宮神社に賽し山吹橋に至り巴ヶ淵を見て午後三時歸校せり

●安藤校長出演 安藤校長は十月十九日

二十一日迄三日間本郡吾妻村に出張全村農會主催に係る竹林講話を擔當し廿二日歸校故伊藤公追悼式 十月廿六日は藤公三年忌に當るを以て午前八時講堂に於て追憶式を舉行せり正面には藤公肖像を掲げ左右には離山々人(桂公卿)及越山々人(芳川伯爵)の書幅を掛けたり校長は先づ故公の忠誠にして先帝の御信任篤かりし事、其精力旺盛にして死に至るまで國家の爲奮闘努力せし事等を述べ功績を偲び遺徳を頌し一入感銘を深からしめたり

●第十二回運動會 十月廿七日新校舎校庭に於て舉行す此日天氣清朗來賓觀客無慮數千に及び六十五番の競技は秩序よく進捗し後六時無事終了せり詳細は別記の如し

●明治天皇追念講話 十一月三日は先帝御降誕の日として去年までは國民の最も祝ふべく娛むべき佳節なりしに引かへて今年は諒闇の涙未だ乾かず菊花徒らに芳芬を残して轉々思慕追憶の種となるを味氣なき我校は此日を紀念すべく午前八時職員生徒一同講堂に參集安藤校長先づ勸語を捧讀し了て暫時の間の沈思默想に一同深き感慨を催うし新らしき講堂も濕り勝にぞ見えし斯くて校長は徐ろに立ちて 明治天皇の御聖徳並に教育勸語御下賜の由來につきて訓話をなす我等國民はとこしへに今日の此日を忘れ先帝の大御心を奉じて益々奮勵すべき旨を諭し十時前講話を終りぬ

●校友會例會 追念講話終了後午前十時より第四次校友會例會を開き安藤校長、嶋内教諭を始め會員十數氏の演説あり午後一時閉會せり此日開會に先づ先頭出場せる選手十三名の合寫に係る寫真出來せるを以て校長は各選手に紀念として一葉地毬與し一葉は校友會に保存する事とせり

●秋期實習 十一月四日より十五日に至る迄明年度造林豫定地及見本林地の地拵並に製炭實習を行ふ但し毎日實習にはあらず二日連續實習一日授業と云ふ日割なり

●校長出張 十一月九日校長は愛知靜岡岐阜三縣下に出張講演及視察をなし十五日歸校せるが愛知縣安城町に於ける山林大會は養蜂會及種苗會を兼ねしものにして山林會へ他府縣より出席せる主なる者は渡邊内務地方課長、安藤本校長とし種苗會へは稻垣博士出席、養蜂大會へは實地家柴崎寅太郎(長野縣人)及青柳浩次郎(神奈川縣人)二氏出席、會者千人に餘り頗る盛會を極めし由りして十一日は安城を去る四里の明治用水々源地視察旅行をなせるが途上安藤校長は竹林講話をなせり 三日校長は安城出發靜岡縣立中泉農學校に至り同校朝禮の代りとして訓話を與へ午後更に竹林に關して講演を行ひ尚同校寄宿舎等詳細に視察する所あり十三日名古屋に戻り縣廳を訪問、十四日は岐阜に向ひ同縣廳及農林學校を訪問視察し十五日歸校せられたり愛知山林大會視察旅行に於ける竹林講話は次號に掲載すべし

●本校參觀人 十月廿日より十一月十五日に至る本校參觀人の主なる者は大分縣立農林學校教諭山本猶市氏外生徒二十五名、北佐久郡岩村町有志者六名、上伊那郡伊那富小學校教員七名外生徒六十名、松本郡文學校主堀内桂次郎氏外生徒二十名、縣會議員若林忠之助、傳田清作、高橋幸作三氏等なり

●乃木將軍旅順の戦に二愛兒を失ふや微笑

文苑

寸感錄 竹 軒

○乃木將軍旅順の戦に二愛兒を失ふや微笑

乃木大將に就きて

久保田吾良

と直に兵を提げて赴き大に高政を取らざるに長慶の如きは常に喜怒色に現はれざる而已に非ず沈勇剛毅泰山前にるも顛怖す大海後へに翻るも自若たるもの也此境容易に學んで至るべからず

憶乃木大將

三年 田 中 生

○昔は晋の謝安能く情を矯め物を鎮む時に秦の符堅八十萬衆を率ゐて南下す朝野震駭す安、夷然として碁を圍めり而して安の弟謝石、及姪謝玄敵を肥水に防ぎて大に之を破り使者捷報を齎して安の所に至る安、覽畢りて座側に置き喜ぶ色なし既にして碁罷み客之を問ふ安、曰く小兒輩聊か敵を取らぬのみと客還るに及び安室に入りて喜ぶ事甚しく履齒の折るゝを覺えず

○喜怒色に現はれずと云ふは東洋人の特色なり西洋人は飽くまで情を外貌に現はさん

○三好長慶一日客を會して聯歌す某客唱へて曰く薄にまじる草の一むらと長慶上の句を續ぐべき順序に當る時に弟實休山山高政と戦ひて敗死し敗報方に至る長慶讀み畢りて座側に置き從容句を作りて曰く枯沼の淺き方より野となりてと乃ち客に謝して曰く家弟今日敗死せり往かざる可からず

○長慶の如きは常に喜怒色に現はれざる而已に非ず沈勇剛毅泰山前にるも顛怖す大海後へに翻るも自若たるもの也此境容易に學んで至るべからず

○喜怒色を色現はざるは克己也彼の薄志弱行些少の艱難に遇ひて直ちに泣言を並べ憂愁煩悶するが如きは克己の精神の缺乏を表明する者なり吾人は總ての場合に於て情を矯めよと云ふには非ず事に臨みて時に此全裕修養あるを欲する者也

乃木大將は眞の偉人也、自己の立場を能く知りて職責を全ふせる人也、軍人として軍人らしかりし人也、眞面目にして飾らず街はざりし人也、富貴利達に離脱せず之を觀ること浮雲を見るが如くなりし人也、所謂古武士の典型たりし人也、一度其閱歷を見れば此等の事實歴然たるを覺ゆ、一代を通じて軍事上の企畫經營に一身を委ねたるは立場を知りて能く職責を盡したるものなり其旅順攻撃に將として出征せらるゝや一身一家を邦家に捧げ、二愛兒を喪ひて猶忠義の爲に欣びたるが如き亦戰場に在りし時の居所食餐の如き自ら粗を取りて之に甘んじ其凱旋するに當りて偉大なる功を誇す却て士卒を失ひたるを罪として之を憂ひたるが如き軍人の鑑として余あり 平素に於て衣食住に質素を極め那須野ヶ原に自ら鍛を取りて勞働せし眞面目、時折の恩賜の金品を悉く部下及婢僕に分與せし高潔、彼の西南の役に聯隊旗を賊手に奪はれしを憾として死を決したる廉耻心、實に武士として將た君子としての鑑なり 這般の殉死は其面目にして街はざるの至情より出でたるものにして我類應せる思想界を一掃し鞭撻するに偉大なる効果あるものと謂つべし、又其効果を以て偉大ならしむ

るが國民の當に努むべき所なり、吾等日本國民たる者、乃木大將の旨を心に銘じて、淬礪の誠を致さざるべからず

小品二題

狂夫生

木曾川の上には朝の氣がもや／＼として居る町はまた沈黙して古靜と云ふような思ふさせる、自分は机に向つて外を見てゐた、誰やらが一人寄宿の門を出て行つた袴をはいて下駄をひっかけた帽子を無造作にかむつて、そうして其の人の息が白く見えた、あの白い息には種々な希望が満ちみちて居るだらう、ちやうしてあの地上に印した下駄の跡のやうに一日一日其の希望に向つて進んで行く、それが又あの霜のやうに後からあとから消えて行きはしないかしら、と、こんをどめどもない事を考へる中に彼は町の角へ曲つて行つた、やは／＼／＼下駄の音がする(十一月十四日十四室にて)

○新しい家

黄な夕日は窓硝子を通して室一ぱいにさして居る、新しい木の香は心持ちよく自分の鼻を刺激して神經をうつつとさせ、自分はこんな事を考へて見た新しい家、此の「インク」の付いた机小刀の疵のある其の對照が自分には云ひしれぬ悲しさを感じしめた、自分達も此の机の様に世の中にたくれて居はしないかしらん、そしてあの石工の鑿の音のやうにカチカチカチカチとこうむだに刻まれるのではないかしらん(十一月五日)

競走

海波

「君しつかりやつて呉れ給へ」是れ非勝つて

此頃の實習

古畑生

うら寒い朝演習場に炭竈の煙が淡う棚引いて居る、條たる凡に淋しさのさのもつた病葉が手に肩にハラと亂れ落ちる、木の倒るゝ音、藪を刈る音、足音、話聲などが靜かな演習場に響く、晩秋の日光が所々木の間に洩れ落ちて風の聲が淋しい切手の手を休めて切株に腰を下しぬ、蘇峽の秋もいつしか過ぎて、木々の梢に紅を染めた葉はもうなかつた、黒川の流れるも白く咽んで居る雪を戴く連峯は王者の誇りを示して碧は空に接して居る、落葉を焚く煙が靜かに立ち昇つて鈍の音が一層高く午近い空に響く縦の木の音がやま

秋夜小丸山へ

杜 鏗

今日の學びの勤にいと頭の疲れたるを暫し癒さんものと杖をあなただ薄もやかされる小丸山に曳きの名残盡せぬ關所橋を渡ればいづくかわかねと秋の夕暮の町の外を呼び行く賣子の聲もいとあわれに其餘韻は家々に炊く煙と共に長く引かれたり、右折左折の路傍の秋草は艶を競ひて香を送りぬ夜煙は横糊として大怪物の臥したるが如き城山を包めり天は明らかに風清く又月の光は水の如く人影は地に落ちて黒影を印しぬ折しもかすかに遠く又近く笛の聲曉々として靜かに耳に響きぬ、眠々たる駒ヶ岳のあなな今月には雲間を離れぬ星はまばらに銀河ははるかに南より北へ淡く走れりあゝ我はこの銀河につきて思に耽りぬ往昔の詩人は之を見て空天の大河として天の川と呼びぬ而して七月七日の夜牽牛織女此の川を渡りて相合す此の會合は一年一回あるのみにして若し其の夜聊かにても雨降らば忽ち其川満水して渡る事を得ずといへり昔の人は詩藪豊かなりしよなど思ふに興は益々加はりて我を忘れて高吟すれば哀れ今迄草叢にすだき居たりし虫の音つと絶えて枯葉のカサカサと落つる音のみいと淋しく耳に響けり、暫しありて彼方の草の根此方の木の根に幽かに虫の聲聞えそめ次第に高く清く其佳調は歌ふが如く彈するが如く再び元の自然にかへりぬ

蘇子謂へるあり「これを取りて禁する無く之を用ひて端き造物者の無盡藏なり」と昔を思ひ今を思ひ或は高吟しつゝ遂に更の關なるを知らず折しも城山のあななより打ち出す時の鐘に促されやをら歸路につきぬ

和歌

諸先生ならびに學生諸氏と宮越に紅葉狩しけるとき 安井 正夫

くれなるもきいもあをきもこきませていまこそきりのにしきなりけれ

某家に菊見にまかりて

ちよふべきさきののふにきてみればよはひものふるこちこすれ

落葉後の山をのぞみて

もみちばのにしきのころもぬぎすててやまははだかになりけるかな

十月十七日遠足途上口吟 竹 軒

古の人もめでたけむ山吹の横手のみち今さかりなり

秋の日をまともうけて向つをのみみちば色をしまざりけり

この奥にすむ山人の宿もがな一夜やどりて秋をかたらむ

ますらをか心たけびて旗上げし八幡の宮居見ればかしこし(旗上八幡ハ即義仲事を擧ぐる所)

古の館のあは田となりてしるしの松に秋風がふく(義仲元服の松の立てる所は中原兼遠の屋敷跡なりと云ふ)

殘霞影尚消えず人は昨宵の夢を追ふ十月廿七日の晩、轟然たる一發の號砲は靜寂沈痛なる朝の空氣を破りて木曾の谷々に響き渡りぬ是ぞ之れ我校運動會の號音なりとは知る人が知らむ武士は馬の轡の音に眼をさますとかや我が三百の健兒は此時早く梅を蹴り起ちぬ、此朝秋霧深く立ち罩めてわれとも分かれぬ山際を喘ぎて行くは汽車の響が霧海の底より聞え来るものは例の木曾川の流なり今日の好晴已に得たり見よ、霧は霧れ行きて旭日は東天にさし昇りぬ嗚呼赫々たる朝、世には亦かゝる壯麗至美の光景ありや今日こそ最上無比の運動日なれ

雄心包むとすれど自ら眉宇に溢れたる健兒の友は各々輕裝に出で立て三々五々會場に向ひぬ、校門に當りて吃として躍ゆる大線門

是ぞ我健兒が數日を費して築き建てるものに見上高く掲げし養氣の額の文字の筆力勁健勇士をして坐ろ飛躍を思はしむるを運動場の中央校旗は高く竿上に飄り竿より引ける幾筋の綱には萬國旗閃けり玄關正面は紅白の幕を張りて會長席及賞品部を設け會場の西南に當りては紅葉もて飾れる會報社賣店あり本年は諒閣中の事として此外にはさせる裝飾も加へずされど運動場を圍める四圍の山巒は折柄の紅葉紅葉ながら錦繡を織り成して眞に是れ秋の美神が靈腕一揮の活畫圖とも云ふべく仰げば東方駒の峻嶺

已に白を冠して立てるあり大自然の美景を背景とせる此運動場裏何ぞ區々たる裝飾を用ひんや時計は正に九時を報じぬ、校長は整列せる健兒の前に徐ろに立ち開會を宣するに先ち一場の訓示を垂る要は前日來職員生徒の協同せる努力により遺憾なく準備を了し今日此快晴に乗じて能く其目的を達せむとするは快心に堪へず只飽くまでも

士道を嚴守し己が眞價を發揮するに努めよと云ふにありき嗚呼抗ヶ原々頭新なる校庭に於て日頃蓄積せし英氣を發揚せむは今日なる哉、今左に當日競技の順序を擧げん

- |               |             |
|---------------|-------------|
| 1、二百メートル      | 15、二人三脚     |
| 2、一人一脚        | 16、三百メートル   |
| 3、籤引競走        | 17、旅裝點燈     |
| 4、戴囊スプーン      | 18、八百メートル   |
| 5、三百メートル      | 19、戴囊スプーン   |
| 6、蛙飛競走        | 20、算算競走     |
| 7、五百メートル      | 21、一百メートル   |
| 8、サックレース      | 22、高飛び      |
| 9、實習服競走       | 23、巾飛び      |
| 10、騎馬競走       | 24、重荷競走     |
| 11、四百メートル     | 25、薪拾ひ      |
| 12、旅裝點燈本校職員   | 26、五人組千メートル |
| 13、養老孝子       | 27、棒倒し      |
| 14、武裝競走       |             |
| 午後の部          |             |
| 28、野仕合        | 31、サックレース   |
| 29、一百メートル     | 32、六百メートル   |
| 30、戴囊スプーン     | 33、薪拾ひ      |
| 31、養老孝子       | 34、四百メートル   |
| 32、一人一脚       | 35、二人三脚     |
| 33、二百メートル     | 36、籤引競走     |
| 34、一千メートル     | 37、旅裝點燈     |
| 35、四百メートル     | 38、登山競走     |
| 36、旅裝點燈(福嶋小)  | 39、珠算競走     |
| 37、四百メートル     | 40、小學生遊戯    |
| 38、四百メートル     | 41、小學生遊戯    |
| 39、四百メートル     | 42、二百メートル   |
| 40、武裝競走       | 43、各級選手競走   |
| 41、武裝競走       |             |
| 42、三百メートル     |             |
| 43、三百メートル(來賓) |             |

雜報

第十二回運動會記事

44、二人三脚 56、角力
45、三百メートル(本校職員)
競技の幕は開かれぬ其進行と共に來賓觀客...

着二着共に福嶋小學校選手の名を輝す事
なりぬ第四十九回の珠算競走は加算なれど...

Table with 3 columns: 八百メートル, 六百メートル, 障害物(三回). Lists names and years of winners.

各級選手競走
三着 古畑 七三君(三年)
二着 唐澤 清三君(三年)
一着 角力三人拔

荷因に當日來賓の重なる者を挙げれば田中
支應長、内藤技師、平川郡長、小林縣屬等...

伊知地謙助殿、佐藤正太殿、龜子善吉殿
八木定義殿、見晴殿、金五十郎殿...

金拾圓 廣澤四郎殿、木曾支應御一同殿、
金七圓 丸六洋服店殿、金六圓 吉村勇七殿...

Table with 2 columns: 選手遠征軍記, 賞品部支出高. Lists expenses and winners.

十月一日附を以て長野中學から『來る十八
九兩日間當校に於て縣下中等學校聯合運動...

# 友林蘇岐

十七日善光寺明け六つの鐘に美しい木曾の夢から覺まされて泥臭い長野の茶を啜つて中學に向つた午後二時までに練習を済まして本營に歸つた中には祈願すべく善光寺に詣つた勇士もあつた夕方大場先生より組割の結果を報告せられ各自好敵ごさんなれと丈の高い目のぼつちりしたのや弱々した細い腕の敵の顔を肌の中に書いて疲れの出ないようと早くから枕を並べて高野をかい

十八日早くから起きて磨き上げた腕を振ふべく中學校に向つた午前九時相圖の喇叭の吹奏と共に各校選手は各々定めぬ席に就いた長野中學校長會長として開會の辭を述べ終つて競技にうつる、先づ庭球部より記さるるに上中、馬場組に我々今泉組が對抗することとなつたブレーの一聲に開戦せられ今泉君得意のサーブに敵を抜き手練のバックに虚を突く龜子君また奮戦すも敵も亦さるもの遂に切齒敗退の止むなきに到つた次は我々吉池組中野々山組に戦を挑む吉池君のサーブとして當らざるなく稻妻の如きエペレーモーションは尠らず敵を面喰はしめ砲玉亦功を奏し敵をして啞然たらしむ。代田君の活動また當を得手練のスト

ップ數回敵を氣死せしめ觀衆一人として汗を握らざるものなく誠に唯一の好取組であつた敵は堪へかねて退き農業熊谷組名乗つて立つ吉池代田兩君の意氣益々昇り從軍の小輩思わす雀躍す敵また努め戦ふも雖も利あらずして退き吉池組遂に優退す斜陽將に城山の林梢を彩らんとする夕刻我々大森組野澤中學の上田組と戦ふ大森君微笑ながら熱球を飛ばして敵を苦しめ一つのミスなく末頼もしき大將哉と觀客擧つて賞した丸山君また努むと雖も時に失あり遂に退くの

止むなきに至つた、擊劍部はと見れば我種君、岡田彌兵衛君、岩久宗治君、塩澤英一倉君師範の唐澤君と刀を交へエイヤツと勇ましく戦ひしかども遂に涙を飲んで退く次宮澤清輔君、加藤正次君、藤田要吾君、横に松川君長商の宮下君に馳せ向ひ丁々切り結んでエイボンと優退し代つて坂田君農業の百瀬君に挑み聲勇しく切つてかきり見ん事敵を切り伏せて優退し最後に我細江君出で長中の北村君と對し受けつ流しつ能く戦ひしかども遂に利あらずして退きぬ弓術部は如何と見れば日置流の姿勢見るからに頼母しく技を競ひて久保田君得點三十六を算し下枝東原兩君之れに及ばず、此夕我校友會長より祝電を辱ふし一同喜悅滿面。十九日天氣晴朗午前八時より優退者の勝負開かる我吉池組上中馬場組と戦ひよく攻めよく守りしかども遂に破れて退き我々の競技終りを告げれば時間の都合上殘念ながら閉會の式に列せずして午後三時發列車にて木曾福嶋驛に向ふ。末筆ながら此の間我等一行に對して非常の便宜を與へられし長野中學生及び木曾福嶋出身杉本兩君、草野、大澤の諸君に厚く御禮を白す

## 會費領收報告

- 壹圓 岡田彌兵衛君
- 七十二錢 日野 雅亮君
- 五十錢 宮澤 嘉一君
- 三十六錢 宮川 永三君
- 中澤 英一君
- 鹽澤 揚君

## 江畑前校長へ紀念品

### 贈呈寄附金領收

- 貳圓宛 小林秀一君、小池金三郎、西野入徳
- 君壹圓宛 宮澤嘉一君、宮川永三君、兒野榮

岡田彌兵衛君、岩久宗治君、塩澤英一、脇田義正君、遠山一郎君、青澤庸三君、山治人君、宮城忠藏君、原田義治君、五十錢宛 木下稗藏君、征矢朴郎君、中澤揚君、征矢野餘所夫君、大嶋角藏君、小羽根安治君、前田正義君、和田宗治君  
小計二十五圓  
累計九十四圓五十錢

## 廣告

當分中止の振替貯金口座番號及代表者左の通り改め開始候間御承知被下度候  
口座番號 東京七六〇〇  
代表者 安藤 時雄

## 木曾産樹實

右多年御愛顧を蒙り難有奉謝候本年も良種多量採取致置候間陸續御用命被下度奉懇願候  
木曾駒ヶ根村 上松  
種苗販賣 蜂須賀忠四郎

明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可